矢巾町民劇場第20回公演

我、矢巾の礎とならん

平成28年2月13日・14日
田園ホール

脚本　千田和子
演出　佐々木絵梨子
脚色　矢巾町民劇場制作部

町民参加による手作りの舞台「矢巾町民劇場」（金子卓嗣実行委員会会長）の第20回公演「我、矢巾の礎とならん」が2月13日・14日の両日、田園ホールで上演されました。

今回の作品は初代矢巾町長の高橋重平さんをモデルに、郷土に対する情熱と献身、それを支える妻との絆を描いた物語。総勢約120人のスタッフやキャストが参加し、約2カ月にわたり練習や準備を積み重ねて本番に臨みました。公演には2日間で約750人が来場。感動があふれる物語と出演者たちの熱演に、惜しみない拍手が贈られました。

物語

昭和22年。

煙山村に住む高橋重一は、妻キミに支えられ、水分国民学校の校長として情熱を持って教育を行っていた。

敗戦占領下で虚脱状態にある情勢の中、有権者が初めて村長を選ぶ統一地方選挙が行われることになった。誰を村長に選ぶのかみんなが注目する中、地元の有志たちが高橋家を訪れ、重一に村長になるようお願いをする。悩む重一だったが、キミの後押しもあり、村長に立候補し当選する。

村民の大きな期待を背負い村長になった重一だが、村の課題は山積していた。特に台風や集中豪雨で岩崎川が氾濫し、家屋や田畑の浸水被害が毎年のように発生しており、村は上流部にダムの建設を計画する。地質調査による場所の変更や用地買収など計画は難航し、みんなが絶望し諦めかけていた中、重一だけは前を向き、住民の意見に耳を傾け、何度も国へ陳情に出かけ奮闘する。

「村民と共に歩む村政」の姿がそこにあった―

矢巾町合併60周年を記念し、矢巾の礎を築いた初代町長、高橋重平さんをモデルに郷土に対する献身と情熱、そして支え続けた妻の愛を描いた創作劇。

平成26年の天上界でキミは夫重一と再会 2人で重一が村長だった頃を回想する

昭和22年。岩崎川流域の水害現場。村民が片づけをしている

勉強道具が流された子どもに紙と鉛筆を渡す重一

奥さまたちの井戸端会議。初めての村長選が話題に

地域住民から村長への立候補を打診され、悩む重一

妻キミの後押しで立候補を決意する

他に立候補者は無く、煙山村長となった重一。農業振興のため、岩崎川にダムを作ることを表明

子どもたちの踊り
雷雨で川が氾濫するイメージ

役場村長室。地質調査の結果ダム計画が白紙に　対策を協議する重一と村職員

昭和32年。3村が合併して矢巾村となり1年。村民運動会が開催される。

ダム建設の説明会。建設地内の住民に移転をお願いする重一　その熱意に住民たちは心を動かし移転を承諾する

ダム建設計画を手に農林省を訪れた重一たち しかし技術課の坂上開拓班長は門前払いをする

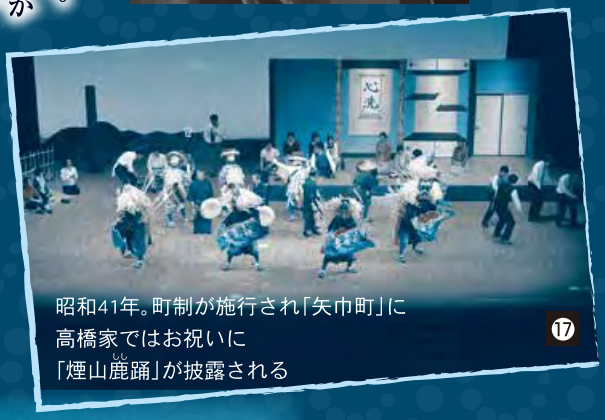
部下を慰める重一　地域のためダム建設はあきらめないと誓う

「人間やる気があれば必ずできる。要はやる気があるかないかにあるんだ」

翌日、かつて国営事業所長だった鈴木と出会う
鈴木は農林省かんがい課長になっていた

計画を見た鈴木は視点を変えてダム建設を防災事業として採択すると約束

昭和39年。東京オリンピックの聖火ランナーが矢巾町を通過。多くの人が出迎える



昭和41年。町制が施行され「矢巾町」に
高橋家ではお祝いに
「煙山鹿踊」が披露される

「重一さんの矢巾という郷土に対する情熱と献身は私への愛と同じでした」

「矢巾はまだまだ良くなるはずさ。俺たちの永遠の愛と契りの様に」

これまでの支援に感謝する重一
今後矢巾町は豊かな田園都市を目指すと宣言する

◀回想が終わって平成26年の天上界
発展した矢巾町を見守る重一とキミ